放課後変身部のヒミツ①

～メイクでなりたい私にチェンジ！～

八星こはく・作

ななミツ・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ

プロローグ　放課後の出会い……006
第一章　教室の憂鬱……018
第二章　ようこそ、放課後変身部へ！……031
第三章　王子様とのデート!?……050
第四章　如月さんの変身レッスン……064
第五章　二回目のデート……084
第六章　ももが、天野望結に教えてくれたこと……098
第七章　ミステリアス少女の秘密……113
第八章　恋は、トラブルと共に……128
第九章　早瀬くんの初恋……145
第十章　まさかの入部希望!?……158
第十一章　新入部員・西園寺怜音……173
第十二章　暗黙のルールが壊れる時……185
第十三章　もっと、変わりたいから……202
第十四章　日常の魔法……212
エピローグ　放課後変身部の部室にて……230

早瀬 葵

望結と同じクラスの
人気者男子。
いつも女の子に
囲まれているけれど、
ある日、「放課後変身部」
にやってきて…？

如月 優斗

姫乃の従兄。
クールで中性的な
見た目をしている。

如月 姫乃

望結と同じクラスの女の子。
あまり学校には
来ていないけど、
とあるヒミツがあって……？

放課後変身部のメンバー

西園寺 怜音

オッドアイの
ダウナー男子。
ちょっとミステリアスに
見えるけど、
明るいふんいき。

佐倉 雪

黒髪でクールな美少女。
いつも本を読んでいる。

月城 蓮

キラキラな
王子様みたいな見た目。
柔らかい話し方で、優雅。

放課後変身部のルール

1. どんな格好をするか自由！
2. 部活中は「部活ネーム」で呼び合う！
3. いつ来ても、帰っても、何をするのもOK！
4. 他の人には変身部のことは絶対ヒミツ！

登場人物紹介

天野 望結

中学二年生で
とっても真面目。
あだ名が「委員長」
なんだけど、
実はかわいいものと
絵を描くのが大好きで……？

天使 もも

望結の「変身」した姿。
かわいいものが
好きなのを隠さない！
ピンクのツインテールが
お気に入り！

プロローグ　放課後の出会い

「……今日も遅くなっちゃったな」
靴箱から白のスニーカーを取り出して、ため息を吐く。
「はあ」
靴箱に書かれた名前を見る。天野望結。私立緑光学院中等部に通う中学二年生だ。
今年も当たり前のように学級委員長になってしまった。別にやりたいわけじゃなかったけど、天野さんしかいないよ！　とみんなに言われたら断れなかった。
だから結局、自分から立候補しちゃったんだよね……
早足で校門へ向かっていると、不意に中庭の花が目に入った。中庭には季節ごとにいろんな花が咲いているのだ。中でもピンク色の花が可愛くて、つい立ち止まってしまう。
「可愛い」

鞄からスマホを取り出して、花の写真を撮ってみる。いつもより上手く撮れた気がして、なんだか嬉しい。
「……ちょっと休憩してから帰ろうかな」
中庭の奥には小さな東屋があって、その中にベンチがある。
近くには自動販売機もあって、のんびりするにはぴったりな場所だ。
この時間にはもう誰もいないだろうし、ゆっくりできるかも。
そう思って、ベンチに向かったら、誰かが座っている。

「え？」
誰だろう、とベンチに近づいた私は、固まってしまった。
銀色の髪に、エメラルドの瞳。そしてアイドルみたいに格好いい顔。まるで、物語の世界から飛び出してきた王子様みたいな男の子がベンチに座っている。
うちの学校の制服を着ているけれど、初めて見る。こんなイケメンがいれば絶対に噂になっているはずだけど、話を聞いたこともない。
転入生とか？　でも、だったらなんでこんな時間にこんなところにいるの？
気になって、目が離せなくなる。しばらく見つめていると、王子様と目が合ってしまった。
「あ……っ、え、あ……！」
目が合った瞬間、王子様は挙動不審になった。視線をさまよわせ、声にならない声をもらしながら、両手をバタバタと動かしている。全然、王子様らしくない仕草だ。
「あの、大丈夫ですか？」
「あ、えっと、その……」
王子様はなかなか意味のある言葉を発してくれない。どうしようかと悩みながら、私は王子様にどんどん近づいていく。

――あれ？　なんかこの顔、どこかで見たことあるような？
銀髪やエメラルドの瞳ではなく、顔そのものをじっと観察する。すると頭の中に、一人の人物が思い浮かんだ。
「もしかして、如月さん？」
私がそう言ったとたん、王子様の顔が真っ青になった。その反応で、私は自分の勘が当たっていたことを確信する。クラスメイトだけど、彼女はいつも教室にこない。
たまに保健室登校をしていて、委員長である私は、先生に頼まれて様子を見にいくことがあるのだ。
彼女が教室にこない理由は分からない。
保健室で何度かしゃべったから、他の子よりは如月さんのことを知っていると思う。だけど、友達と呼べるほどには彼女のことを知らない。
そして、如月さんは女の子……のはずなんだけど。
「ち、違うからっ！」
王子様が叫んで立ち上がる。
間違いなく如月さんの声だ。

彼……彼女は、叫ぶのとほぼ同時に走り出してしまった。
「待って！」
状況は全く理解できていないけれど、このまま帰るわけにはいかない。
私は全力で、遠ざかっていく如月さんを追いかけた。

「如月さん！」
私が如月さんの手を掴んだのは、旧部室棟の四階だった。旧部室棟は現在使用されておらず、出入りも禁止されている。
私を見つめる如月さんの瞳は涙でいっぱいだ。
「あ、あの、い、委員長、その……」
か細い声で話し始めたかと思うと、如月さんは勢いよく土下座した。王子様の土下座なんて、似合わなすぎて頭が混乱してしまう。
「お、お願い！　こ、このこと、誰にも言わないで……！」
土下座なんてやめてよ、とか、そもそもどういう状況なの？　とか聞きたいことが多すぎる。
とっさに返事をできずにいると、ぎぃ、と音を立てて、近くの扉が開いた。

中から出てきたのは……黒髪の美少女。腰までまっすぐ伸びた綺麗な黒髪に、雪みたいに真っ白な肌。そして、切れ長の色っぽい瞳。
「なんの騒ぎ？」
女の子が視線を送ると、如月さんはびくっ、と震えた後立ち上がった。
「ごめん！　あの、わ、私だって、クラスの子にバレちゃって……」
「はあ？」
見た目に反した野太い声に目を丸くすると、こほん、と女の子が軽く咳払いをした。
「とりあえず二人とも、中に入って」
先程の声よりは高いものの、女子にしては低めの声だ。でもそれが、この子にはよく似合っている。
有無を言わせない響きに、思わずうなずく。
私と如月さんは、彼女に続いて近くの部屋へ入った。
部屋の中は、旧部室棟とは思えないほど片付けられていた。もちろん部屋そのものは古くて傷んでいるけれど、ゴミやほこりはない。
部屋の中央に置かれた大きなテーブルも、ちゃんと綺麗に拭かれている。よく見ると、部屋

の隅にリュックが二つ置いてあった。
――もしかして、二人のかな？
そう思っていると、女の子が如月さんをテーブルの近くにある椅子に座らせて、ぴしりと言った。
「ちゃんと説明して。なにがあったのか」
如月さんが震えたままうなずく。それから私をうるうるした目で見つめた。
「わ、私、ついこの姿のまま中庭に行っちゃって、たまたまこの子――委員長と会ったの。そしたら委員長が、すぐに私だって気づいちゃって……」
そこまで聞いた女の子は深いため息を吐き、如月さんを鋭く睨みつけた。しゅんとした顔で俯いてしまった如月さんは、なんだかすごく気の毒だ。
如月さんだって気づいたの、まずかったみたい……
「……委員長。さっきも言ったけど、その……今日のこと、みんなには内緒にしてくれないかな。本当に、お願い……」
今にも泣き出しそうな声で言うと、如月さんは椅子から立ってまた土下座しようとした。
慌てて如月さんをとめて、もう一度椅子に座らせる。

「そんなことしなくていいから！　それより、もうちょっと詳しく話を聞かせてもらえないかな？　ちょっと、混乱しちゃってて……」
話してくれないかな？　と女の子の方を見たけれど、口を開く様子はない。あくまでも如月さんに話をさせるつもりらしい。
本当に、なにが起きているのかが全然分からない。本当にこれ、どういう状況なの？
目の前にいる如月さんは、やっぱりすごく格好いい王子様に見える。でも、如月さんは眉毛をハの字にして、王子様とは思えない表情で黒髪の女の子を見た。
「えっと、それは……」
許可を求めるような眼差しに女の子がうなずくと、如月さんが続きを話してくれた。
「実はここ、放課後変身部の部室なの。……部っていっても、もちろん非公認だし、私たちが勝手に名乗ってるだけで……部員もその、私たちだけなんだけど」
「放課後変身部？」
「うん。名前の通り、放課後に変身するだけの部活。あっ、あとは、部活ネームっていうのもあるの。私の部活ネームは、月城蓮」
如月さんはそう言って、胸に手を当てた。

月城蓮。確かにその名前は、王子様みたいな今の如月さんにぴったりだ。
「それで、この子が佐倉雪」
言いながら、如月さんは女の子……雪さんに視線を向けた。改めて雪さんの顔をじっと観察してみる。
彼女は私の視線を受けても、眉一つ動かさない。冷静な子だな……
それに、如月さんと違って、この子の正体は分からない。
知らない子なのかも。
私が視線を戻すと、如月さんがおずおずと話を再開した。
「ここに集まってなにかをしてる、ってわけじゃないの。ただこうやって好きな格好をして、なりたい自分になるだけ」
「なりたい自分に……」
「勝手に旧部室棟を使うのは悪いことだって分かってる。でも、内緒にしてほしいの。お願い、委員長……！」
泣きそうな顔の如月さんにお願いされる。それに、なにも言わないけど雪さんも私をじっと見ている。

涙目の王子様からの頼みを断れるほど、私の心臓は強くない。
「分かった」
二人がやっていることは、立派な校則違反だ。旧部室棟への立ち入りも、許可なく部活を行うことも。
それに、学校でコスプレみたいなことをしているなんて、先生たちが知ったら怒るに違いない。もし私が今日のことを先生に言ったら、二人が怒られるだけじゃなくて、旧部室棟の管理も今より厳しくなると思う。
本物の真面目な委員長なら、校則違反はすぐに先生へ報告するだろう。
「放課後変身部のことは、誰にも言わない」
だけど私は、好きで真面目な委員長をやっているわけじゃないのだ。
私たち以外誰もいないし、この状況で委員長らしい行動をする必要なんてない。
そんなことをしても、疲れるだけだから。
それに、二人がやっていることが、ちょっと気になった。
「……二人はどうやって変身してるの？」
だから、私はそのままこの教室を出て行かずに、そんな質問をしてしまった。

私はたまたま正体に気づいたけれど、きっとほとんどの人は気づけないだろう。それくらい、如月さんの変身はクオリティーが高い。
別人過ぎて、どんな風に変身したのかがちっとも想像できない。
私の質問に、如月さんはほっとした顔になって立ち上がった。
「ウィッグとメイクだよ」
そう言ってウィッグを勢いよく外す。
ウィッグネットもとれば、ショートの黒髪がふわっと広がった。これがいつもの如月さんだ。
「目の色はカラコンで変えて、メイクで男の人っぽい顔にしてて……あっ、あとね、身長はシークレットシューズで盛ってるの」
如月さんが靴を脱ぐ。すると、確かに高かった身長がいつもぐらいに戻った。
シークレットシューズって、こんなに違和感ないものなんだ……！
「すごいね。如月さん、王子様みたいだったよ」
「本当っ!?」
如月さんはぱあっと顔を輝かせた。王子様の顔のままだけど、とってもかわいい。
如月さんの笑顔を見たのは初めてだ。保健室ではいつも、怯えたような顔で俯いていたから。

「普段は部室の外に出ないようにしてるんだけど、つい中庭で写真を撮りたくなっちゃって……この時間なら、誰もいないかなって」
「確かに、中庭の花って綺麗だもんね」
王子様と綺麗な花。ものすごく絵になっていたし、写真を撮りたくなる気持ちは分かる。
まあ、先生の見回りもあるかもしれないし、かなり危険な行為だったとは思うけど。
「……バレたのが委員長で助かった。本当にありがとう、委員長」
私の目をまっすぐ見て、如月さんが笑う。
如月さんの笑顔を見たのは初めてかもしれない。
控えめな如月さんの微笑みが、私にはとても眩しく見えた。

第一章　教室の憂鬱

白いレースのカーテン、毛足の長いピンクのカーペット、天蓋付きの猫足ベッドと、ベッドと同じデザインのテーブルと椅子。

そして、ドレッサーの上に並ぶいくつかの可愛いコスメ。

真面目そうでもなければ、『委員長』らしくもない部屋。

そんな自分の部屋は、私が思う可愛いを詰め込んで作った。

ここには、他人の目なんてないから。

「放課後変身部、か」

呟いて、制服のままベッドに寝転がる。目を閉じると、如月さん……いや、月城蓮さんの姿を思い出してしまう。

銀髪にエメラルドの瞳を持つ王子様。

いつもの如月さんとは全くの別人で、アニメや漫画の登場人物みたいにきらきらしていた。

「好きな格好をして、なりたい自分になる、か……」

立ち上がって、大きな鏡の前に移動する。鏡に映っているのは、見慣れた姿の私だ。

校則をしっかり守った膝下のスカート。全部のボタンをとめたワイシャツ。髪の毛はみつあみにして地味なヘアゴムでまとめている。

そして、いかにも委員長という感じの黒縁眼鏡。

私がこんな部屋に住んでいるなんて、クラスメイトは想像もしないだろうな。

「はあ……」

なんだか、憂鬱な気分だ。私はいつも通りなのに、そんな自分が嫌になってきた。

別に学級委員長をやるのが嫌だったわけじゃない。小学生の頃だって何度か学級委員長になったし、六年生の時は児童会の会長だってやった。

全部周りに薦められたからだけど、最終的にやると決めたのは私だ。

だけど、いつの間にか『真面目な委員長・天野望結』というキャラクターばかりが大きくなった。そしていつからか、私自身も、そのキャラクターに自分を寄せるようになってしまった。

「本当は、制服だってもっと可愛く着たいのにな」

スカートを折って短くしたいし、ワイシャツのリボンも大きくしたい。

メイクだってしたいし、髪型だってツインテールがいい。

毎朝髪をくるくるに巻いて、お気に入りの香水をつけて学校へ行きたい。

でもそんなの、真面目な委員長『らしくない』。つまり、私らしくないってことだ。

「なりたい自分に変身……」

放課後変身部について語る如月さんの姿が頭から離れない。いつもよりずっといきいきとしていて、楽しそうで、きらきらしてた。

「変身するのって、どんな気分なんだろう」

もし私も、変身できるとしたら。

——周りの目なんて気にせず、好きな格好をして自由に振る舞ったら……私は、どんな気持ちになるんだろう？

☆★☆★☆★☆★

教室にくるのは、いつも一番目。

クラスメイトがやってくるたびに、おはよう、ときちんと挨拶をする。

別に、嫌なわけじゃない。早起きは得意だし、朝の教室は勉強に集中できるし、いろんな子と話せるし。

でも、明日も明後日もずっとそうしなきゃいけないと思うと、疲れる。私だってたまには、ぎりぎりまで眠っていたい日もあるのに。

ちら、と如月さんの席を見る。如月さんの席は廊下側の一番端の列で、なおかつ一番後ろの席だ。つまり、一番出入りがしやすい席。

如月さんが教室にきやすいように……って配慮だろうけど、このクラスになってから、如月さんが教室にきたことは一度もない。

「望結」

ぽん、と肩を叩かれて、慌てて顔を上げる。ぼーっとしすぎて、教室に人が入ってきたこと

に気づかなかったらしい。
「おはよう。珍しいね、ぼーっとしてるの。なにかあった？」
「ううん、なんでもない。ちょっと眠かったのかも」
そうなんだ、とうなずきながら、クラスメイトで友達の琴音が私の目を見つめてくる。なんだか心の奥まで見透かされてしまいそうで、とっさに目を逸らした。
他の子はみんな私のことを委員長って呼ぶけど、琴音は私のことを委員長と呼ばない。
琴音に名前を呼ばれると、なんだかいつもほっとする。
「ねえ、望結。望結も次のコンクール、応募するんでしょ？」
「うん。そのつもり」
私と琴音は美術部だ。ゆるくて幽霊部員も多いけど、私たちは真面目に活動している。
締切が夏休み直前のコンクールに、去年、私たちは応募した。
応募は強制じゃないけど、どうせ描くなら、コンクールにも出したいし。
「期末テストと絵の締切が近いから、ちょっと大変だよね」
笑いながら、琴音が髪を耳にかける。
小さな赤い石のついたイヤリングが、窓から差し込む陽光を反射して輝いた。

もちろん、アクセサリーの着用は校則違反だ。だけどうちの学校はゆるいから、小さなイヤリングくらいで注意されることはない。
琴音はすごく派手ではないけれど、アクセサリーとか、ヘアアレンジとか、リボンの結び方とか、ちょっとしたところで個性を出すのが上手い。
なにもかも校則通りで無個性な私とは、全然違う。彼女のイヤリングを眩しく思いながら、私はうなずいた。
「テスト勉強も大事だもんね」
「うん。まあ今年までは、そんなに気合入れなくてもいいのかもしれないけど」
琴音と同じように考えている生徒は、うちの学校にはかなり多いだろう。
うちは中高一貫校で、何事もなければこのまま高等部へ進学できる。ただ、三年生の時の成績によって高校一年目のクラスが決まるから、三年生はわりと必死だ。
「高校でも望結と同じクラスになれるよう、私も来年は頑張るから」
「今年も頑張りなよ。それに私だって、一番上のクラスになれるとは限らないんだよ？」
「もう、謙遜しないでよ。望結なら絶対、一番上のクラスでしょ」
さらっと明るい笑顔で言われたら、なにも言えなくなる。

琴音だけじゃない。他のみんなだって、私が一番上のクラスになると思ってるんだろう。
だって私は、真面目な委員長だから。もし一番上のクラスになれなかったら、私はみんなからどんな目で見られるんだろう。
期待に応えられなかった時のことを想像するだけで怖い。
「望結、本当すごいよね。前のテストも、学年一位だったんでしょ？」
「……それは、まあ」
「本当頭いいなぁ。私も頑張んなきゃ！」
琴音やみんなに悪意がないことは分かってる。むしろ、本気で私を褒めてくれていることも。
だけど、プレッシャーを感じないでいられるほど、私だって強くない。
委員長なら大丈夫だよね。委員長は絶対一番上のクラスだよね……そんなことを言われるたびに、身体が重くなってしまう。
「望結？」
「あ、ごめん。なんか、またぼーっとしちゃって」
「寝不足？　あ、もしかして昨日も、遅くまで勉強してたとか？」
「……まあ、そんなところ」

嘘だ。昨日はずっと如月さんについて考えていて、眠れなかっただけ。
「やっぱり。偉いけど、無理は禁物だよ。勉強もほどほどにね」
「……うん」
ゆっくり息を吐いて、教室を見回す。いつの間にか、ほとんどのクラスメイトがきていた。
自由な校風にぴったりな、個性豊かなクラスメイトたち。
教室にいるのがしんどくなって、私は机に視線を落とした。

昼休みになって、私は慌てて立ち上がった。
「じゃあ私、ちょっと如月さんのところに行ってくるね」
「了解。それにしても、マメだよね。先生に言われてるからって」
琴音が感心したように笑う。曖昧にうなずいて、私は席を立った。
如月さんが今日は保健室にきていると、昼休みになる直前に先生が教えてくれたのだ。
「じゃあ、また後でね」
琴音に手を振って教室を出る。自然と、廊下を歩くペースが速くなってしまう。
私、今、すごく如月さんに会いたい。

会って、如月さんの話を聞きたい。
放課後に出会ったあの時から、私の頭の中は如月さんでいっぱいだ。
保健室の扉を開け、失礼します、と言ってから中へ入る。
「いらっしゃい」
金城先生が穏やかに微笑んだ。
三十代前半の、丸眼鏡をかけた優しそうな女性の先生だ。
金城先生に話を聞いてほしくて、わざわざ保健室にくる子も多いらしい。
「如月さんよね？」
「はい。今日、きてるって聞いて」
「ええ。こっちよ」
保健室はカーテンで二つに区切られている。手前が治療スペースで、奥が事務スペース。
如月さんはいつも奥にいて、勉強や読書をしている。
そっとカーテンを開けると、如月さんが勉強の手を止めて、私を見上げた。
「……い、委員長、きてくれたんだ」
「うん」

最初の頃は、私の顔を見ると怯えていた。でもだんだん変わっていって、最近はちょっと嬉しそうな顔で私を迎えてくれる。
……きっと如月さんは、人と関わりたくない、ってわけじゃないんだろうな。
いつもなら、なんとなく学校の話をしておしまい。
でも、今日は違う。今日は、如月さんと話したいことがあるから。
「ねえ、如月さん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「えっ、あ、な、なに？」
戸惑っている如月さんの隣に座る。今の如月さんからは、月城蓮さんの姿は想像できない。
普段の如月さんは、なんていうか……言い方は悪いけれど、かなり地味だ。前髪が長くてほとんど目が見えないし、黒髪ショートで黒い瞳。
身長は私と同じくらいのはずだけど、猫背気味なせいで実際よりも低く見える。
王子様みたいな華やかさなんて、今はどこにもない。
私は如月さんの耳元に口を寄せ、小さな声で言った。
「放課後変身部のこと」
「……こ、小声でなら」

「うん、ありがとう。じゃあ……変身部を始めたきっかけって、なんだったの？」
如月さんのことも、放課後変身部のことも気になってしょうがない。
だから、知りたい。
こんな風に誰かを強く知りたいと思ったのは、生まれて初めてだ。
「……わ、私ね……」
如月さんの声は震えている。スカートを握り締める手だって、小刻みに震えている。だけど、何度も深呼吸をして、まっすぐに私を見てくれた。
「……ずっと変わりたかったの。ほら、私って上手く人と話せないし、それどころか、人の目をまっすぐ見ることすらできなくて……見た目を思いっきり変えたら、違う自分になれるんじゃないかなって、そう思ったの」
「如月さん……」
「……私ね、自分のこと、好きじゃないの」
如月さんの声があまりにも辛そうで、私はそっと如月さんの手を握った。
「でもね、ずっと、それが嫌だったの。本当は自分のこと好きになってあげたくて、だけど、今の自分じゃどうしても好きになれなくて……だから、変わりたかったの」

「男装にしたのは、どうして？」
「あ、それは単純に、私は男装の麗人っていうのが好きで……」
どうやら月城蓮さんは男性ではなく、男装の麗人、という設定だったらしい。
ちょっとややこしいけど、でもなんか、いい。
いいね、と囁くと如月さんの目がきらきら輝いた。
「やってみたら、他人になるって感覚が気持ちよくて。なんて言えばいいのかな……普段の自分から解放されるっていうか、自分の気持ちに素直になれるっていうか……」
うーん、と何度も唸りながら、如月さんが必死に言葉を紡いでくれる。
「それにね、放課後の、ちょっとの間だけっていうのもよくて。ほらその、ずっとならたぶん無理だと思って……見た目だけじゃなくて、口調とかも変えるから」
「……確かに」
家に帰ったら『委員長』の私はおしまい。家でまでずっと『委員長』を演じるなんて無理だ。同じように四六時中きらきらな蓮さんでいるのは、きっと如月さんも不可能だ。だから如月さんが『月城蓮さん』になるのは放課後だけなのだろう。
深くうなずいた私に、如月さんがふと言葉を止めた。

「……ていうか、委員長はなんで、そんなに変身部に興味を持ってくれたの？」
「え？」
「ご、ごめん、気になっちゃって」
「謝らないで。そもそも質問したの、私だし」
「……うん」
「私はただ、なんていうか……」
深呼吸をして、如月さんの顔をじっと見つめる。私と如月さんは、きっとまだ友達じゃない。
私たちは、お互いに知らないことが多すぎるから。
でも、どうしてだろう。如月さんには本音を話せる気がする。
ううん、本音で話したい。
「――変わりたいって、私もずっと思ってたから」
「委員長が？」
如月さんが目を丸くする。
如月さん、私のことをどんな風に思ってたんだろう。
「うん」

「……委員長でも、そんなこと思うんだ……」
「思うよ。私も、如月さんといっしょ」
「そうなんだ……」
うん、とうなずいて、私たちの会話は終わってしまった。でも不思議と今は、この沈黙も嫌じゃない。
変わりたい、なんて、人に言えたのは初めて。
本音を口にするって、こんなに気持ちいいことなんだ。

第二章　ようこそ、放課後変身部へ！

翌日、私はくらくらしながら授業を受けていた。
まずい。めちゃくちゃ眠い。眠すぎる。授業中なのに、今すぐ眠ってしまいそう。
だけど、授業中に居眠りをするわけにはいかない。そんなの、委員長らしくない！
何度もまばたきをして、なんとか意識を保つ。

昨日、如月さんと保健室で話をして、前よりも変身部のことが頭を離れなくなってしまった。そのせいで、昨日は一睡もできなかったのだ。

二日間の睡眠不足のせいでもう、身体は限界に近い。

ちらっと周りを見ると、すっかり眠り込んでる男子も何人かいる。うらやましい。私だって、周りの目を気にしてばかりいるのは嫌だ。だけど、どうしても気になってしまう。

「ねえ、委員長。今日、顔色悪くない？　もしかして寝不足？」

なんとか眠らずに三時間目を終えると、隣の席の早瀬葵くんがそう聞いてきた。

机に突っ伏そうとしていた私は、慌てて姿勢を整えて顔を上げる。

早瀬くんは爽やかなイケメンで、学年どころか学校で一番モテる男子。

同級生だけじゃなく先輩や後輩からも人気で、入学してから既に三十人以上から告白されているという噂もある。そしてたぶん、その噂は本当だ。

ほとんど機能していない頭を無理やり働かせて、なんとかうなずく。

「……まあ」

「へえ。委員長でも、そんなこともあるんだ？」

「たまにはね」

「勉強でもしてたんだろうけど、ほどほどにね。無理しちゃだめだよ」

早瀬くんは優しい。私を心配してくれてるんだろうなってことも分かる。でも、勝手に決めつけられたことにちょっともやもやして、笑うだけで返事を終わらせる。

すると、それを見ていた他の女の子たちがこっちに近づいてきた。

「本当、委員長って真面目すぎ！」

「すごいよね」

「さすが委員長」

いつもはあまり話さない、きらきらしたグループの子たちだ。

たぶん、早瀬くんと少しでも話がしたいんだろう。

早瀬くんと隣の席になった時、うらやましいってかなり騒がれたんだよね。恨まれなかったのはたぶん、真面目な委員長キャラのおかげ。みんな、私が恋愛なんてしないって思ってるから。

まあ、恨まれずに済むのは助かるんだけど。

寝不足の理由を勝手に決められちゃうのも、本当のことを言わずに済む、ってメリットもあるんだよね……

早瀬くんと話す女の子たちをぼーっと眺める。
そうしているうちに、気づいてしまった。
「……あ」
——そっか。私、委員長でいるのが楽なんだ。
真面目な委員長キャラを続けているのは、周りの目を気にしているから……だけじゃない。
私自身が、委員長キャラでいるのが楽だからだ。
周囲が作り上げたイメージ通りの私でいれば、本当の私を誰からも否定されずに済む。
大事なものを、好きなものを、心の中だけにしまっておける。
そうすれば私は、傷つかずにいられる。
「委員長？　どうかした？」
女の子たちと話していたはずの早瀬くんが私の顔を覗き込んでくる。
なんでもない、と私はいつも通りの顔を作って首を横に振った。
「そういえば午後、英語の小テストがあるなって。ふと思い出しただけ」
「本当委員長って真面目すぎ」
はは、と早瀬くんが軽やかに笑う。周りの子も、早瀬くんといっしょに笑った。

私は微笑んだまま、机の上のシャープペンシルを見つめる。
きっと私はまだ、真面目な委員長をやめられない。自分を偽って生きる楽さを手放すことはできない。
……本当の自分を否定されるのは、すごく怖いから。
小学校低学年の頃、私は毎日ピンク色のふりふりの服を着て登校していた。髪の毛はいつもツインテールで、自分のことを望結、と名前で呼んでいた。
ぶりっ子、馬鹿っぽい、似合わない、頭悪そう……当時のクラスメイトから、そんなことを言われた。
私はなにも言い返せなかった。好きなことを馬鹿にされても、自分自身を否定されても、なにも言えなかった。本当は、すごく悔しかったのに。むかついたのに。
少しずつ、心の中のもやもやがなくなっていく。それと同時に、眠気もどこかへ飛んでいった。
如月さんのこと、そして放課後変身部のことが頭から離れない理由。
そんなの、一つしかなかった。
中庭で、運命の王子様と出逢ったから。

王子様の正体はクラスメイトの女の子。しかも、いつもは王子様とは程遠い子だ。物語に出てくるような完璧な王子様じゃない。だけどきっと、私にとっては正真正銘の王子様。
王子様と出逢って、私の人生は変わり始めている。ううん、私自身が、変えたいと思えるようになったんだ。

☆★☆★☆★☆★

「失礼します！」
大声で言いながら、勢いよく旧部室棟の四階にある教室のドアを開ける。
中には予想通り、如月さん……いや、蓮さんと、雪さんがいた。
二人とも、いきなり入ってきた私を見て目を丸くする。
「委員長、どうしたの？」
改めて見ても、やっぱり蓮さんはすごく格好いい。
それに、如月さんの大好きが詰まった姿だ。如月さんに話を聞いた今、前以上に蓮さんが輝いて見える。

如月さんは、ずっと変わりたいと思っていた。
そして実際に、好きな自分に変身する道を選んだんだ。
如月さんって、すごい。
私は大きく息を吸い込むと、二人の前に立った。
「今日は、二人にお願いしたいことがあって」
「お願いしたいこと？」
緊張で、鼓動がどんどん速くなっていく。
人生でこんなに緊張したのは初めてだ。でも、この緊張は嫌いじゃない。
「私を、放課後変身部に入れてください！」
ここで、如月さんといっしょに変わりたい。
真面目な委員長じゃない、別の私になってみたい。
私も、大好きをまとって生きてみたい。
周りの目なんて気にせず、私が好きな私になってみたい。
「よろしくお願いします！」
深く頭を下げる。少しすると、拍手の音が聞こえた。

ゆっくりと顔を上げると、二人が笑顔で手を叩いてくれていた。
蓮さんは、ちょっと泣きそうな笑顔。そして雪さんは、安心したような笑顔。
「ようこそ、放課後変身部へ」
そう言って笑ったのは蓮さんだ。
如月さんじゃない。声も口調も、いつもの如月さんとはかけ離れている。
私に正体を知られて慌てていた時の蓮さんとは、雰囲気が全く違う。きっとこれが、本来の月城蓮さんなのだろう。
「安心した。バレた時はどうなるかと思ったけど、部員になるなら歓迎するわ」
蓮さんの後ろで雪さんが微笑む。
王子様みたいな月城蓮さんと、黒髪美少女の佐倉雪さん。
私も今日から、この二人の仲間なんだ。私もここで、いつもの私とは違う私に変身できるんだ。
どうしよう。そんなの、嬉しすぎる。
ときめきが止まらない。どんな顔をすればいいのかも分からなくなって、私はちょっとだけ泣いてしまった。

☆★☆★☆★☆★

「じゃあさっそく、僕が放課後変身部についてもっと詳しく説明するね」
蓮さんは椅子に座って、長い足を見せつけるようにゆっくりと組んだ。「僕」という口調が自然で格好いい。
その表情はとてもいきいきとしていて、見ているだけで嬉しくなってくる。
ここでの如月さん……ううん、蓮さんは、こんな風に堂々と話す人なんだ。
「放課後変身部では、どんな格好をするかも自由。僕たちは制服を着ていることが多いけど、別に私服だっていい」
雪さんはうなずくだけで、あまり口を挟もうとはしない。
物静かな子なんだろうか。
私が二人に見とれていると、蓮さんは微笑んでひとさし指をぴんと立てた。
「前にも言ったけど僕たちには部活ネームがあって、それで呼び合うのがここでのルール」
「うん。それが、月城蓮さんと、佐倉雪さんって名前なんだよね」

うなずいて、話の続きを聞く。
「そう。そして、本名を呼ぶのは禁止」
なるほど。放課後変身部の活動をしている間は、如月さんを本名で呼ばないように気をつけなきゃ。
「だから、委員長にも部活ネームをつけてもらう必要がある」
「部活ネーム……」
「うん。どんな名前でもいい。自分で、自分に名前をつけるんだよ」
自分で自分に名前をつける……か。なんか、ちょっとドキドキする。
私は、天野って苗字も、望結って名前も別に嫌いじゃない。
私の望みが実を結んで幸せになれますように、って両親が一生懸命考えてくれたことも知ってる。
でも、私が考えた名前じゃない。
新しい名前を自分で考えるなんて、すごくわくわくしちゃうかも！
ただ、すぐには名前が浮かんでこない。
「二人は、どうやって部活ネームを決めたの？」
とりあえず二人の話を聞こうと思って、私は二人に視線を向けた。
「僕は、格好良くて、中性的な名前、ってイメージで決めたかな」
そう言うと、蓮さんは右手を顎にあて、少しだけ首を傾けた。
ちょっぴり芝居がかった仕草が、蓮さんにはよく似合っている。
「雪さんは？」
「私は雰囲気、かな。ちょっとおとなしそうな感じで……あと、雪、って言葉の響きもなんか好きなの。冬を思い出すし、ちょっとクールな感じもするでしょ」
「なるほど……」
月城蓮という名前も、佐倉雪という名前も、二人にぴったりだ。
本当の名前をつける時は、どんな子になるかなんて分からない。だけど、部活ネームは、イ

メージにぴったりな名前を自分で考えられる。
「まあ、焦らないで、ゆっくり決めたらいいよ。名前も、それ以外のことも」
蓮さんが柔らかく笑う。甘い笑顔には、やっぱり見とれてしまった。
「見た目も、性別も、名前も、性格も、仕草も……ここでは、全部が自由だから」
全てが自由。まるで、真っ白なキャンバスに一から絵を描いていくみたいだ。
「ありがとう。ゆっくり考えてみる」
部活ネームはきっと、ここでの私を表す大切な名前。
だからこそ、心の底からいいなって思える名前にしたい。
「うん。別に、期限もないから。それと、変身部は活動日とか活動時間が決まってないんだ。だから、好きな時にきて、好きな時に帰っていいし、部室でなにをしてもいい」
「やることがないってだけだけどね」
雪さんは横から口をはさんで、呆れたようにため息を吐いた。
でもその表情はとても柔らかくて、変身部の活動が好きなんだってことが伝わってくる。蓮さんは、雪さんのそんな態度に慣れた様子で苦笑して、私に視線を戻した。
「で、最後に一つ。変身部において一番重要なルールは、他人に変身部の存在を言わないこと。

いい？」
「うん、分かってる。絶対、誰にも言わない」
先生たちにも、クラスメイトにも秘密の部活。なんだかアニメや漫画みたいでどきどきする。
「ありがとう。それ以外、たいていのことは自由だから」
蓮さんが説明をそう締めくくると、雪さんが読書を始めた。
ブックカバーをつけているから、どんな本を読んでいるのかは分からない。
本当に、ここでは好きなことをしていいんだ。
気が抜けるのと同時に、ふわっと眠気が襲ってくる。大きなあくびをしてしまって、慌てて口をおさえると、蓮さんがくすくすと笑った。
「眠いの？　なら、寝ちゃってもいいんだよ」
蓮さんに優しい声で言われたら、もう我慢できない。私は教室の椅子を引いて腰かけると、もう一度大あくびをして、机に突っ伏した。
わずかに開いた窓から、生ぬるい風が入り込んでくる。
正面の席からは、雪さんが本のページをめくる音が聞こえてくる。
なんて居心地がいい場所なんだろう。

「おやすみ、委員長」
耳元で、蓮さんが甘く囁いてくれた。
学校で寝るなんて、生まれて初めて。私がそんなことをする日がくるなんて……
おやすみ、と蓮さんに返事をするよりも先に、私は眠りに落ちていた。

目が覚めた時には、下校時刻の直前だった。
慌てて荷物をまとめ、蓮さんと雪さんに別れの挨拶をして、早足で家へ帰った。
居眠りをしたからか、頭がすっきりしている。家に帰ってすぐ、私は自分の部屋にあるお気に入りの椅子に座った。
「よし！」
スケッチブックの新しいページを開く。家でだけ使うこのスケッチブックは、もう十二冊目だ。
これは、私の好きなものだけを集めたスケッチブック。描いてあるのは好きなアニメのキャラクターとか、可愛いと思った洋服やコスメとか、ばらばらだ。
だけど全部、私のお気に入り。

そして、このスケッチブックによく描いているオリジナルキャラが一人いる。
ピンク色の髪をした可愛い女の子だ。髪の長さはイラストによって違うけど、胸下くらいのイラストが多い。髪型はストレートツインだったり、コロネツインテールだったり、ツーサイドアップだったりといろいろ。
いろんな服を着ているけれど、リボンやフリルがたっぷりついた可愛らしい服ばかり。
インターネットやテレビで可愛い服を見つけても、すぐには買えない。お母さんに買ってもらえたとしても、なかなか外へは着ていけない。
だからいつも、欲しい服をこの子に着せて、好きなアクセサリーをこの子につけて、理想の格好をさせていた。特定のモデルがいるわけじゃなくて、この子にはひたすら私の好きを詰め込んでいる。
つまりこの子は、私の理想。
「……もし、この子みたいになれたら」
そんなこと、今まで考えたこともなかった。だってあまりにも現実離れした見た目だから。
でも、変身部では、髪色も瞳の色も変えられる。
常識やいつもの自分なんて関係なく、好きな自分になれる。

だったら私は、大好きを詰め込んだ自分になりたい。
何枚も何枚も描いたイラストをパラパラとめくり、自分の描いた『理想の女の子』を眺める。
「ピンク色のウィッグと、あとはカラコンもいるよね。コスメも……たぶん、家にあるやつだけじゃ足りないよね？」
メイクは校則で禁止されているから、普段はメイクなんてしない。だけど、パッケージが可愛くてつい買ってしまったコスメはいくつかある。
でも、きっと家にある物だけじゃ足りないはずだ。
「……そういえばウィッグとかって、どこで買うんだろ」
スマホで検索してみると、大量のサイトが引っかかった。
いろんなサイトがありすぎて、どこを見るのが正解か分からない。
それに、実物を見ずに購入するのも怖い。写真と実物とでは、色や質感が違うだろうし。
「……誘ったら如月さん、いっしょに見にいってくれるかな」
実は今日、如月さんと連絡先を交換した。
いっしょに出かけよう、と誘うのはちょっと緊張する。如月さんは、お出かけが好きじゃないかもしれないし。

だけど、誘ったら、もっと如月さんと仲良くなれるかもしれない。
決めた。如月さんを誘ってみよう。
『今度、ウィッグとかカラコンとか、変身に必要な物をいっしょに見にいってくれない？』
そうメッセージを送ると、すぐに既読がついて、一分もしないうちに返信がきた。
『行く！　私、土日も平日も、いつでも暇だから！』
前のめりで、力強いメッセージ。
如月さんも、私と仲良くなりたいって思ってくれてるのかな？　だとしたら、すごく嬉しい。
『今週の土曜日とかどう？』
スケジュールを確認して、一番近い休みの日を伝えてみた。
すると、またすぐに返信がくる。
『大丈夫!!』
ビックリマークが二つって、なんか、普段の如月さんからは想像できないかも。
如月さん、どんな顔でメッセージを打ってるんだろう。
そんなことを想像したら、なんだかちょっと楽しくなってしまった。

☆★☆★☆★☆★

「結構、いいんじゃないかな？」
鏡の前で、くるっと一回転する。白いワンピースの裾が、ふわりと揺れた。
今日は、如月さんとお出かけする日。待ち合わせ場所は池梟駅だ。
池梟にはコスプレ用品の店が多くて、ウィッグやカラコンを買うには最適な場所らしい。
「……如月さん、びっくりするかな」
今日はいつものみつあみじゃなくて、耳の下でツインテールにしてみた。薄いけどメイクもやってみたし、眼鏡は外して、クリアコンタクトをつけてみた。
大変身したわけじゃない。でも、いつもの私とは違う。
貯金していたお金を全部財布に詰めて、鞄を持って家を出る。
こんな格好で外出するのはいつぶりだろう。
如月さんはきっと、委員長らしくないね、なんて言わない。それが分かっているから、いつもと違う格好ができた。委員長らしくないかも、なんて悩まずに済んだ。

電車を降りて、待ち合わせ場所である中央改札口へ向かう。
約束の時間までは、あと十分。
前髪、崩れてないよね？
手鏡を取り出し、前髪をチェックする。スプレーで固めたおかげで、全く動いていなかった。
「……なんか、どきどきしてきちゃった」
まだ、如月さんと合流すらしていない。でも、期待が膨らんでそわそわしてしまう。
いつもの私とは違う服を着て、ちょっとだけメイクもして。しかもいっしょに出かけるのは、如月さんだ。この状況で、わくわくしない方がおかしい。
「委員長、おまたせ」
私を呼ぶ声が聞こえて、慌てて振り返る。
そこに立っていたのは、いつもの如月さんじゃない。
右手をあげて優雅に微笑む、私服姿の蓮さんだった。

第三章　王子様とのデート!?

「えっ!?」

てっきり如月さんの姿でくると思っていた私は、びっくりしてなにも言えなくなってしまう。

そんな私を見て、蓮さんはくすっと笑った。

「この方が、デートっぽいかなって」

「で、デートって……」

そんなこと、一言も言ってなかったのに！

正体が如月さんだと分かっていても、蓮さんは王子様にしか見えない。きらきら王子様に甘い声でそんなこと言われたら、どきどきしてしまう。

「デートじゃないの？　僕は、そのつもりできたんだけど」

「れ、蓮さん……！」

悪戯っぽく笑うと、蓮さんは一瞬だけ如月さんの表情になった。